様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６月１５日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2011
課題番号：20520387
研究課題名（和文）　方言・歴史・理論の融合を目指した日本語指示詞の研究

研究課題名（英文）　Research on Japanese Demonstratives aiming at the fusion of dialectal, historical and theoretical studies.

研究代表者
堤　良一（TSUTSUMI　RYOUICHI）
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・准教授
研究者番号：80325068

研究成果の概要（和文）：指示詞の方言差という問題については、これまで注目されてこなかった。前年度までは、主に文脈指示の指示詞の用法について、特にア系列の指示詞の使用に方言差がある地域があることを指摘してきた。具体的には以下のように、実際に経験を通して知っているのではない対象に対して、相手から十分に情報を得ていると判断できれば、アノで指せる地域が存在するということである。具体的にはそれは佐賀県や長崎県、福岡県の北部にかけて観察される。

(1)（一度も会ったことはないが、二週間ほどずっと噂を聞かされていた小阪という人について）
A:このあいだからずっと話していた、小阪っていうのがいるだろ？今度、来ることになったんだよ。
B:本当？私ずっとあの人にあいたかったんだよね。

一方､これらの文脈指示の方言差を調査するうちに､現場指示の用法の方言差を知ることで、これらの方言差の解明につながるのではないかと考え、今年度は現場指示の用法を、実験的調査によって解明することを目指した。
現場指示の指示詞はコノ＝話し手の周り、ソノ＝聞き手の周りあるいは中距離、アノ＝それ以外という考えが当然のように受け入れられ、それ以上の詳細な検討は皆無に等しい。
そこで我々は、関西地域と中国地域で詳細な調査を行い、実際に地域によって指示詞の使用に差が存するのか調査した。結果としては、関西地域話者に比べて中国地域の話者は、ソノで指す領域が狭く、時にはソノはほとんど現れないことを発見した。今後、詳細な調査を行うことで、現場指示用法の全容を明らかにするとともに、指し方の差が文脈指示用法の方言差とどのような関わりがあるのかを明らかにしていきたい。

研究成果の概要（英文）：
Little attention has been paid to the question of dialect differences in the deictic use of Japanese demonstratives. Uncovering this question leads us to a better understanding of demonstratives in our language system. In 2012, we examined potential differences in the use of demonstratives between speakers in the Kansai and Chugoku areas of Japan. While both of these regions are located in the Western part of Japan, the dialect in each is quite different. Our data suggests that there is a difference in demonstrative use between the two regions, particularly in terms of how the space around the hearer is referred. Specifically, speakers in the Kansai region tend to use sono-NP, which supports the findings in existing studies. However, speakers from the Chugoku region use ano-NP to refer to the same area.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２００９年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１１年度	700,000	210,000	910,000
総　計	3,400,000	1020,000	4,420,000

研究分野：言語学
科研費の分科・細目：基盤研究（C）
キーワード：指示詞、方言、現場指示、文脈指示、人称区分、距離区分

１．研究開始当初の背景

指示詞の使用には方言差があるのだろうか。このことについて堤(2002)では、九州の一部の方言において、実際に会ったことがない人に対して、次のようにアノで指すことができることが報告されている。

(2)（2週間ほど同じ人の話を聞かされた後で）
A:今度、平尾がうちに遊びに来るんだ。君も一緒にどう？
B:私、あの人に会ってみたいと思っていたのよ。

本研究では、このアノの使用が実際に存在しているのかどうかをつきとめ、この使用について理論的、歴史的、社会言語学的に考察することを目的とした。

２．研究の目的

上記のように、文脈指示の用法の違いは、歴史的な事実によるものなのか、あるいはその地域に特有の、何らかの要因によって引きおこされるのであろうか。これらの問いに答えることが本研究の目的である。

また、現場指示の用法も、理論的には様々な考察がなされているものの、実際のデータをもとに分析した研究はあまりなく、データ自体も蓄積が抱負であるとは言い難い状況にある。このような状況の中では、できるだけ世代差を考慮しなくてもよい短期間に、できるだけ多くの地点で指示詞の現場指示の用法についての調査を行い、現場指示の用法に方言差が存在するのかどうかを明らかにしていく必要がある。本年度の本研究の目的は以上のとおりである。

３．研究の方法

上記の課題に答えるために、まずは調査項目を設定し、次の地域で調査を行った。

(1)九州地方（佐賀県嬉野市）
(2)その他の九州出身者への聞き取り調査

この中で、我々は文脈指示のアノの中に、「例の読み」と、我々が呼ぶところの特殊な用法の存在に気付いた。それは次のようなものである。

(2)B:平尾君って誰だったっけ？
A:ほら、二週間ほど前から話をしているだろ？僕の学生時代の友人の。
B:あー、あの人（＝話題に上がっていた例の人）ね。あの人、一度会いたいと思っていたんだ。

我々の調査で発見した佐賀県嬉野地方のアノは、調査日当日の聞き取り調査および、その後複数の九州方言話者への聞き取り調査によって、「例の読み」のアノではなく、「しばらく話を聞いているうちに、すでに知っている人であるかのよう」に指すアノであることを確認している。

このような方言の差異は、記憶指示と呼ばれるこれらの例にのみ特殊に現れるものなのであろうか。それとも、これらの差異を引きおこす要因は、他の指示詞の使用の場面においても確認されるものなのであろうか。

このことを確認するために、我々は本研究の後半において、指示詞の最も基本的な用法である現場指示の用法における方言差に着手した。現場指示の使用について実証的に研

究したものは、これまでのところ高橋太郎氏を中心に進められたもの（高橋・鈴木(1980)、高橋・中村(1992)）および安部清哉氏によるもの(2008)があるのみであった。しかも彼らの研究は東京方言（共通語）話者を扱ったものであり、関西方言話者や中国地方の話者を対象とした研究は皆無である。

我々がとった方法は、高橋太郎氏が行った実験方法を議論し、少しく手を加えたものである。これにより、上記したような発見があり、指示詞の現場指示の用法における方言差が明らかになりつつあるところである。

４．研究成果

本研究の成果は以下のように記述できる。

(1) 文脈指示の用法に、方言差が存在することを明らかにした。

特に、これまで共通語（標準語）の研究から、直接的な経験がなければア系列指示詞が使用できないとされてきたが、九州佐賀地方の方言においては、経験はしていなくてもア系列指示詞が使用できる場合があることが分かった。

(2) 現場指示用法の方言差について、精緻な調査から明らかにすることができた。

主に、関西（滋賀、京都）地域と岡山地域を中心とする中国地域との差異の違いを調査することによって、これまで机上の理論として論じられてきた現場指示詞の用法について、実際の調査に基づいて論じることができた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕

① 堤良一(2008)「談話中に現れる間投詞アノ（一）・ソノ（一）の使い分けについて」『日本語科学』第 23 号、国立国語研究所（査読付き）、pp. 17-36

② 堤良一(2011)「西日本の若者のコソアー高橋調査法による岡山大学での調査から－」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第 31 号、岡山大学大学院社会文化科学研究科、pp. 15-26

③ 岡﨑友子（2008）「指示語「サテ」の歴史的用法と変化について一『源氏物語』を中心に一」『国語語彙史の研究』二十七，国語語彙史研究会，pp.183-202

④ 岡﨑友子（2009）「接続詞「サテ」について一現代語の用法とテクストー」『就実論叢』第 38 号, 就実大学･就実短期大学, pp.63-78.

⑤ 岡﨑友子（2010）「サテの歴史的変化について－中世天草版平家物語を中心に」『語文』第 92-93 輯，大阪大学国語国文学会，pp.65-73.

⑥ 岡﨑友子（2011）「指示代名詞の直示用法における領域調査－高橋調査法による，2010 年中四国地方の若者のコソアー」『就実論叢』第 40 号，就実大学・就実短期大学，pp.29-48.

⑦ 岡﨑友子（2011）「指示詞系接続語の歴史的変化－中古の「カクテ・サテ」を中心に－」『日本語文法の歴史と変化』青木博史編，くろしお出版，pp.67-87.

⑧ 松丸真大(2011) 「富山県における勧誘表現の伝播とその要因―人の移動との相関に注目して」『滋賀大国文』49、1-15

⑨

〔研究発表〕

① 堤良一「フィラーのアノー・ソノーの出現場所（と身体動作）について」第 3 回指示詞研究会における口頭発表、岡山大学、2008 年 8 月 9 日

② 堤良一「日本語の言語表現と言語文化～フィラーを中心に～」韓国江原大学人文大学日本学科における研究発表、江原大学人文大学、2009 年 8 月 26 日

③ 堤良一「中国語母語話者による日本語の現場指示詞の用法について」日本語プロフィシェンシー研究会 2010 年研究例会における口頭発表、京都外国語大学（京都市）、2010 年 11 月 13 日）

④ 岡﨑友子・堤良一「指示代名詞の直示用法における領域調査－高橋調査法による、2010 年若者のコソアー」（岡﨑友子（就実大学）・堤良一）、土曜ことばの

会・第 5 回指示詞研究会における口頭発表、大阪大学（豊中市）、2011 年 1 月 22 日

松丸真大「東西日本方言接触地域における方言の変化と維持」国立国語研究所共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」公開研究発表会『方言周圏論の再検証―近畿を中心に―2011年11月17日

〔図書〕

① 岡﨑友子『日本語指示詞の歴史的研究』、ひつじ書房、2010 年 2 月
② 堤良一『現代日本語指示詞の総合的研究』256 ページ、ココ出版、2012 年 2 月
③ 岡﨑友子（2011）「第５章直示と人称　５．２指示代名詞・指示副詞」『シリーズ日本語史３　文法史』金水敏・高山善行・衣畑智秀・岡﨑友子, 岩波書店, pp.202-217.

６．研究組織

(1)研究代表者
堤　良一（TSUTSUMI　RYOUICHI）
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・准教授
研究者番号：80325068

(2)研究分担者
岡﨑　友子（OKAZAKI　TOMOKO）
就実大学・人文科学部・准教授
研究者番号：10379216
松丸　真大（MATSUMARU　MICHIO）
滋賀大学・教育学部・准教授
研究者番号：30379218

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：